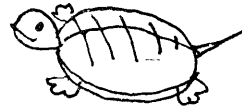


# 幼児のためのよいお話

本 田 和 子



はじめに

「赤い自動車があります。特急こだまがあります。黄色いバスもいます。ブルーのコロナにはMちゃんとパパとママが乗っています。」

自動車の絵本をみながら、2才8ヶ月のMはこんな「お話」を創作した。Mはこの行為を「読む」と称している。したがって、Mの「ご本読んで」という要求には、このような応じ方が必要とされるわけである。絵本に附されている解説、例えば、「特急こだま。はやいはやい、フルスピード。風を切って走ります。」というような文章を読んでやっても、Mは不満そうに、「もつと読んで」をくり返すのであ

る。Mにとっては、描写や叙述は殆んど不要であって、必要なのは「事実を全て知的に羅列する」という手続きであり、想像の入り込む余地は僅かに自分たちを画面に入れこむことだけなのである。

絵本に対するMの態度は、余りにも見事に、児童心理の教科書的であって、改めて「発達段階とは何と軽視し得ないものであることよ」との思いを深めさせられるのである。したがって、Mの好む「お話」には次のようなものが多い。

「Mちゃんとパパとママが汽車に乗りました。蒸気機関車で、ポーツ、シュッシュュッシュュッシュュッシュュッガッタンゴットンガタゴトガタゴト。トンネルをくぐります。ポ

「シューシューシューシューシュー。」或いは、「みんなでバスに乗りました。Mちゃんとおババとママとです。『みなさま』の観光バスでした。プッププップー。コーストップが赤になりました。とまってください。赤ですよ。バスはとまりました。よかったですね。」

さて、「好むお話」という表現を先に用いたけれど、Mくらいの幼児の生活の中に、多少なりともまとまった「お話」は、比較的入りこみにくいものである。絶えず動き、移り変わる興味のままだに、短かい、しかし類似した遊戯活動を積み重ねていくのがMの一日であるから、Mの心的な構えが「お話」を聞く態勢をとるのは、極く限られた場合にしかあり得ない。それは、主としておひるねとか、夜の就寝時とかのひとときであろう。それ以外には、絵本をみながら、或いは絵を描きながらの、補助行為として受け入れられる場合が多いのである。

したがって、好むも好まぬもなく、Mくらいの幼児にとっては、先にあげたような「お話」が、生活の中に入り込み、子ども自身とかわり合いを持つ唯一のものである、とも言い得るのである。

このような状態を改めてみつめ直すならば、「幼児のためのよいお話」を考える場合に、そのお話の内容とか構成を検

討する一歩前の段階として、その「お話」が提供される際の姿を考えてみる必要を感じさせられるであろう。つまり、その「お話」がどのような機能を果たすものであり、その「お話」を受け入れることが、幼児の活動の形態としては、どんな種類に属するものであるか、という事から考えを進めていかねばならないのである。

「お話そのものが楽しまれている」場合と、「他の活動の補助材料としてお話が用いられている」場合とでは、「よいお話」の基準も自ずから異なってくるであろうと思われるからである。

以上のような観点から、まず幼児の生活と「お話」との関係の持ち方を明らかにし、その上に立って「よいお話」の選び方を考えてみようと思う。

### (1) 幼児の生活と「お話」

2才から6才までの対象を、幼児という一括した名称でよぶことに、そもそも無理を感じるのは私ばかりではないであろう。かりに、幼稚園児というように対象を限ってみたところで、満3才～6才までの、発達のみにてかなり異なったレベルの子どもたちが一まとめにされるわけである。この幼児たちの生活形態は、各々の段階に応じた異なりを示すので

あるから、当然、この生活と「お話」が関係を持っていく場合、その関係の持ち方は発達に応じて異なったものとなるであろう。

まず第一の段階 2、3才児と「お話」との関係は次のように把握することができる。

① 幼児の経験を「ことば」で整理するために「お話」が存在している。

絵本をみるという視覚的経験、或いは飛行機の音を聞くという聴覚的経験、これらに対して、「ことば」を用いてなされる説明が、「お話」の形態をとっているわけである。

「ホラ、飛行機がとんでるのよ。ブーンブーンって。今日はお空が曇ってよくみえないわね。でも、きつと〇〇の方へとんでいくんでしょうね。お天気の日だったら、青いお空に、銀色のつばさがヒカッと光ってみえるかもしれないわね。ホラ、まだ聞こえてますよ。ブーンブーンって。」

この例は、爆音を聞きつけた3才児に、短かい「お話」をしている保育者の姿である。こんな「お話」は幼児との生活の中に随所に見出されるものであろう。そして、このタイプの「お話」は、対象の年令が幼ないほど、生活の中で大きな比重を持っているのである。

2、3才の幼児たちにとって、ことばだけが組み立てる抽

象的・観念的な世界は、まだ緑の遠い存在である。この子どもたちにとって、具体的に経験し、接触した世界に名称を与え、さまざまな現象を一括し、整理してくれるものが「ことば」なのであるが、「お話」もこのような機能を帯びたものとして存在しているのである。

この時期の幼児たちにふさわしい「お話」として、「赤ちゃん話」とよばれる「身边童話」や「今、ここ話」とよばれる一連の童話があげられている。「今、ここ話」とは、本来は一九二〇年代のはじめ、アメリカ合衆国において、ルシー・S・ミッチェルという女性によって主張された童話理論であり、それに基づく作品を指すものである。ミッチェル夫人の主張とは、次のようなものであった。すなわち、5才以下の子どものために「今」の世界について話す「お話」が余りにも少ないという事実を指摘して、「今」、「彼らの生きているこの世界」に関する物語を提供しようというのである。そして、ミッチェル夫人は、子どもの活動をテーマとし、子ども自身の使うことばによって、「お話」を創作することに努力したのであった。

ミッチェル夫人及びその弟子たちの作品に対しては、その後、さまざまな疑問や批判が投げかけられている。「今、ここ主義者」による「今、ここ話」には、余りにもプロットが

なすぎ、子どもたちに何の楽しみも、何の笑いも与えない  
というのである。確かに、

「子どもがおもちゃを持ってかいだんをおります。ピタン、  
ピタン、ピタン、ピタン。一段一段おります。子どもはお勝  
手にはいります。お母さんがおります。お母さんは子どもに  
おかしをくださいます。」というような「お話」は、「三匹  
の小豚」や「七匹の小羊」のように充実した筋を持たず、何  
らの事件をも含んでいない。「お話」を楽しむ構えのできた  
子どもたちの心をつかまえる力は、とうてい持ち得ないであ  
らう。

しかし、「お話」が、「今、ここ」で子どもたちが経験し  
たことがらを、説明し整理する存在として、子どもと関係を  
持っている場合には、この「今、ここ話」が、最もふさわし  
いタイプの「お話」として浮かび上ってくるであろう。

このタイプの「お話」では、幼児の経験したことがらが直  
接的に内容としてとり上げられていること、その表現は、叙  
述的表現よりもむしろ擬音や擬声を使用した絵画的表現であ  
ること、くり返しがあること、短いこと、などがそなえるべ  
き条件としてあげられるであろう。そして、使用されること  
ばは、適格に事実を指示するものであると同時に、ことばの  
ひびきとして美しいもの、無駄のないものであることが望ま

れるのである。

②幼児が保育者の存在を身近に感じ、それを確かめるため  
の材料として「お話」が存在する。

3才になったばかりのKが激しく泣き出した。大好きな赤  
いクレヨンを隣のSが使って折ってしまったというのであ  
る。Sが慌てて返してくれた折れたクレヨンを手にとろうと  
もせず、いつまでも泣きじゃくっている。保育者がそっと、  
Kの隣に坐って、Kの肩に手を廻した。そして、折れた赤い  
クレヨンをもてあそびながら、小さな声でささやくようにこ  
んな「お話」をした。

「おやおや、赤いクレヨンさんが二つ出てきましたよ。『K  
ちゃん、今日は』ってこっちの少し長いのが言ってますよ。  
こっちの短いのはね、こっちの妹なのよ。『Kちゃん、あた  
し、小っちゃい赤ちゃんよ。仲よくしてね』って言ってます  
よ。クレヨンのお兄さんと、妹と、二人でKちゃんの所に来  
たのね。」

いつの間にかKが泣きやんで、保育者の左右の手に握られ  
た折れたクレヨンを見ている。やがて、そっと、折れた二本  
をKは手にとった。

この例は、3才児のグループで観察されたものである。こ  
の場合、Kは、保育者の「お話」の内容にも心を動かされた

であろうが、それ以上に、身近かに坐ってくれ、低いやさしい声でささやき続けてくれた保育者の存在が、興奮した心を静め、落ちつかせるための最大の要因であったとみてよい。そして、低く、静かにささやかれる「ことば」が、保育者の存在を身近かに、そして確かなものとして、さらに自分自身のために存在するものとして、その幼児に感じとらせるための役割を果しているのである。

この傾向も、対象が幼ないほど多くみられる。

この場合の「お話」は、内容は殆んど問題にならなくなってくるであろう。むしろ、「話し方」と、その幼児に対する保育者の態度如何が、その「お話」を生かすこともでき、殺すこともできるのである。

③幼児たちが「お話」を聞くことを楽しむ。そしてことばで構成された観念の世界に遊び、現実には経験し得ないさまざまなことがらを、ここで体験する。

この段階に到達して、はじめて、多くの物語や文学作品が登場するわけである。年令的にみて、4才の後半から5才にかけて、徐々にこの傾向がみえ始め、5才代から6才にかけて物語を楽しむ態度がより深まってくるのである。

この時期には、つまり「子どもとお話」の関係が、はっきりと「人間と文化財」の関係として成立したこの段階では、

「お話」の「文化財」としての価値が十分に検討されねばならないであろう。

幼稚園や保育所で、幼児を対象にしてなされている「お話」の性格を分類してみたとき、「何かを伝えるために」或いは「何かの説明の道具として」、さらに「ある活動への導入として」、用いられる「お話」の比重が余りにも大きいのに驚かされたことがある。もちろん、「お話」は、これらの機能をも備えているし、これらの目的にもよくかなうことができる。しかし、子どもの側に、ある段階を経てやっと到達した「物語を楽しむ得る素地」が用意されているとき、これを無視した「お話」の扱われ方が、余りにも安易になされすぎている現状に、問題を感じさせられるのである。

「お話」を、「ことばによって組み立てられた文化財」と考へて、言語文化財に対する感受性をより豊かにより高いものへと育てていく努力を、怠ってはならないのではなからうか。

## (2) 言語文化財としての「お話」

幼児期に与えられた童話の種類が、将来の読書傾向をどの程度まで決定するのか、果たして直接的な影響があるのか、ないのか、これは未解決の課題である。しかし、子どもをと

りまくことばの世界が、豊かで美しいものであり、子どもの興味を十分にひきつけ得るものであった場合に、その子どもの抱くことば及びことばで組み立てられたものへの愛情と関心が、より強められ、より深まるであらうことには、疑念の余地がないのである。

幼児に与えられ好まれるよい物語の基準として、原則的には次のようなことがいわれている。

まず、

①よく企てられた筋をもつこと。

②物語の展開のスピーティなもの。

③子どもたちの生活感情に身近かでありながら、想像力を存分に働かせ得るようなもの。

④リズムミカルなもの。

⑤感情の豊かさを育てるようなもの。

⑥ことばの環境として正しく美しいもの。

などである。

しかし、特定の事件も起らず、スピーディに展開する筋も持たない物語でありながら、子どもの心を巧みに把えるものもあり得るし、心の豊かさを育てる上から是非与えたいと思われるものも少なくない。「よいお話」を選ぶ場合、「よい」の基準がなかなか難かしいのである。

そこで、私共は、まず広い範囲から、さまざまな種類の物語を選び出し、そのひとつひとつを検討してみるという努力をせねばならないであろう。そして、さまざまな種類の物語の持つ異なったまよみや美しさを究見せねばならない。子どもの心の世界の拡がりや深みを育てるのに有効だと思われる要素、子どもの行為を望ましい方向へと改変させるための働きかけが可能だと思える点、或いは子どもを存分に楽しませ、子どもに愛されるであろう部分などが、思いがけなく見出されるものである。これらの物語は、童話として、少なくとも、「一つの価値」は備えているわけである。これらの物語が、子どもの生活感情に照らし合わせてずれのない物であり、与えるおとなの感動をも誘うものであるなら、それは「よいお話」と考えてよいのではないであろうか。

最近話題になった創作童話「いやいやえん」は、まずおとなの心を把える作品であろう。子どもの世界が突にユーモラスに微笑ましく描かれていて、読む者を楽しくするのである。しかし、こうした保育園の毎日の生活描写が、果たして子どもたちの心を把え得るか否か、一瞬の疑問を抱かされる者も少なくないと思われる。もちろん、保育園での子どもの生活が、極めて楽しい筋立てをもつて展開されているのであるが、いわゆるメルヘン的な要素のない物語だからである。

しかし、この物語は、子どもたちの心を巧みに把握することができた。子どもたちは極めてスムーズにこの物語の中に入りこみ、物語の世界を生活するのである。これは、この物語の生活感情が、子どもたちの生活感情とピッタリ重なり合うという強味を持っているからに外ならない。

「お話」を選ぼうとする場合、それが「子どもにどう受けとられるか」「子どもの世界に浸透し得るものであるか否か」を判定する基準は、伝えようとする対象の生活感情のあり方なのである。

「お話」が、保育者によって作られる場合にも、同様なことが言い得るのではなからうか。

## むすび

幼児のために、私共はどのような「お話」を、どのように選んだらよいのであろうか。それらの問題を考えてきたわけである。そして、まず、与えようとする対象と「お話」との関係の持ち方を把握することから考えを進めてみた。子どもと「お話」との関係が異なれば、「お話」の果たすべき機能も、使用される目的も、自ずから異なってくると考えるからである。

そして、幼児期の最初の段階で与えられる「お話」は、幼

児たちの経験を整理し、周囲の現象をことばに置き換えて認識させるための機能を果たすものとしたのである。

「お話」を「文化財」と考え、「物語」としての内容」を問題にするのは、幼児期の後半を対象とする場合である。そして、物語の選択は広範囲から行ない、幼児の生活感情を基準とした与え方を考えたわけである。幼児の生活感情と根本的にあい入れず、幼児の世界に通用することばでそれが語られるのでなければ、その内容や筋立てがどんなに巧みであろうとも、「幼児のためのお話」には成り得ないのである。

そして、いずれの場合にも、語られる「ことば」のひびきの問題とされた。「お話」は、純粹に「ことばだけで組み立てられ」「ことばだけに頼る」材料なのである。「ことば」としての美しき、正しさを欠くもの、「ことば」として幼児に受容しにくいものは、そもそもその条件を欠くといえるであろう。

「お話」のもつ「ことばのひびき、ことばの味」と、「ことばの適格さ、明瞭さ」に、私共は、より以上の注意を払わねばならないと思うのである。

(尚絢女学院短期大学)